

## 博報財団 第10回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

## I. 研究成果概要

氏名	NGUYEN Lan Anh Thi(グエン ラン・アイン ティ)
在住国名	ベトナム
所属・役職	ハノイ大学 日本語学部・日本文学文化学科 副学科長
招聘回(招聘研究期間)	第10回 (2016年3月1日 ~ 2016年8月31日)
受入機関	国際日本文化研究センター
招聘研究テーマ	「ベトナム人日本語学習者に向けた日本事情教材作成」
研究目的	「日本事情」科目では「日本の文化・社会一般に関する知識」を対象とするものから、「異文化適応」を目標としたものまで、実に多種多様な内容と目標を持つ授業を行おうと考えている。もちろん、教育機関の目的や形態により、「日本事情」と銘打つことが適切な科目はさまざま存在するであろうが、名称と実態とがかけ離れていると思われる場合には、それぞれの内容にふさわしい科目名を設定するべきであろう。スケジュール作成にあたり、次の4つの目標を定める。①日本語の能力を高める(読解が中心、聴解力向上も図る)。②日本語学習の興味を引き上げる。③日本文化、社会を認知させ、理解させる。④自国文化と比較する。各課題では、ウォーミングアップ、新語、本文と復習問題の4つがあり、目的は日本文化事情の紹介により、異文化理解を深め、多様なニーズを満たし、学習者の興味を保持し続けていくことである。
研究概要:	<p>言語はその国の文化や思想を表すものである以上、日本語だけでなく、日本文化、習慣、日本人の思考様式に関する知識も身につけることが必要になる。今日の日本語教育では日本語という言語を教えるだけでなく、「日本事情」に関する授業も実施することが一般化している。言語の教育以前の文化・社会の教育という観点で「日本事情」を捉えることができるわけだが、実際に学習者のニーズ、目的が違えば「日本事情」も当然ながら違ってくる。様々な言語教育には、それぞれ立場というものがあ、言語をどう捉えるか、文化をどう捉えるか、そして教育対象は何か、どのような方法か、教材はどうするか、教室での態度など多方面の要素が含まれている。ここではベトナム人学習者を対象に基本的な編成について検討する。日本事情とは「日本の色々なことを知る」ことなので、教材では地域論(特定の都道府県、地理環境)、日本史、日本経済・政治概要、日本の習慣・年中行事、日本の祭り、日本の衣食住文化、伝統的な異文化理解を深め、多様なニーズを満たし学習者の興味を保持し続けていくことを中心とする。</p>
展望:	<p>今回の研究はベトナムでこれまで前例がないため、研究成果が完成した際には、ベトナムにおける日本事情教育に大きく寄与できると考えられる。アンケート調査結果を活用し、海外における日本事情教育現場の一つであるベトナム人日本語学習者のニーズが明らかになったこと、その日本語学習者のニーズに応えられるような日本事情の授業法及び授業像が形作られたことの2点が将来への展望をさらに考察するうえで有用だと考えられる。</p>